

2000年3月9日  
主催(財)水野スポーツ振興会

## 「1999年度ミズノスポーツライター賞」受賞者決定

財団法人水野スポーツ振興会(会長:水野正人ミズノ社長)では、'90年度より「ミズノスポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

本日(3月9日)、高輪プリンスホテルで'99年度受賞者選考委員会を開き、受賞作品および受賞者を決定いたしました。

受賞作品および受賞者は以下の通りです。

### 【ミズノスポーツライター賞 最優秀賞】(トロフィー、副賞 賞金100万円)

・『魔術師』 立石 泰則 氏(発行:文藝春秋)

### 【ミズノスポーツライター賞 優秀賞】(トロフィー、副賞 賞金各50万円)

・『血と知と地』 吉川 良 氏(発行:ミデアム出版)

・『カープ球団創設50年史』企画連載報道

中国新聞社 運動グループ

カープ50年取材班

詳細は別記の通りです。

(お問合せ先)

(財)水野スポーツ振興会 事務局 桂川・安達 TEL. 03(3233)7009

ミズノ広報室 小西・高橋 TEL. 03(3233)7037

## 記

- 名 称 : 1999年度 ミズノ スポーツライター賞
- 制 定 目 的 : スポーツに関する優秀な作品とその著者(個人またはグループ)を顕彰して  
スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手  
スポーツライターの励みになる事を願い制定
- 選 考 対 象 : 主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評  
論・  
ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの
- 選 考 委 員 : 委員長代行 水野 正人 氏(財団法人 水野スポーツ振興会会長、  
ミズノ社長)
- 委 員 岡崎 満義 氏(元文藝春秋社取締役、  
「ナンバー」初代編集長)
- 〃 田 英夫 氏(参議院議員、元共同通信社 社会・文化部長)
- 〃 廣 堅太郎氏(元日本体育協会 広報専門委員会委員長)
- 〃 松本 千代栄氏(社団法人 日本女子体育連盟会長)
- 〃 村上 龍 氏(作家)

※50音順

対 象 者 : 日本人および日本在住の外国人

受賞者及び  
選考理由

『魔術師』 立石 泰則 氏(発行:文藝春秋社)

ノンプロもどきの弱小球団だった西鉄を率いて水原・巨人に対抗し、日本シリーズで巨人に三タテを食らわせた名将・三原の物語である。いまま強烈な印象を残している“三原マジック”“魔術師”の言葉に象徴されるように、その人生は巧みなチームづくりや奇跡ともいえる名采配が織り成す栄光の歴史であると同時に、球界の読売支配に挑戦し続けた闘いと苦悩・挫折の連続でもあった。

三原に関しては自叙伝をはじめ多くの著作があるが、著者は膨大な資料と丹念なインタビューの積み重ねによって、これまで知られていなかった事実にも光をあてる。調査は綿密で、中西の三冠王か豊田の首位打者かと話題になった微妙な問題も敢えて踏み込んで真実を追い、三原の欠点も冷静にみつめている。三原の手腕や人心掌握術を検証するくんだりや、球団フロントと現場を指揮する監督との関係の微妙さなど、日本のプロ野球界が抱える問題も浮き彫りにする取材力、筆力は、「企業もの」のノンフィクションを手がけてきた筆者の非凡な能力を感じさせる。

三原脩の伝記として始まった取材は三原個人の枠にとどまらず、オビに「球界の読売支配に挑んだ男達」とあるように、豊田泰光、中西太、稲尾和久ら彼を取り巻く人物の群像も鮮やかである。オールドファンにとっては、知将・三原脩の奇跡のドラマが鮮やかによみがえる大河ノンフィクションであり、読み応えは十分だ。ボリュームは圧倒的で軽快とはいえず、同じ記述の繰り返しや傍線の多さも若い人には難点に思えるかもしれない。だが、今のプロ野球界を見るとき、その誕生・成長過程の不幸がそのまま残っている、いや増幅されているとさえいえるのであり、広く日本のスポーツ界関係者に読んでほしいと願う作品である。

今回の実務委員の間で候補作品についての評価が様々にわかれたが、この著作は5人中4人が最高の点をつけている。

『血と知と地』 吉川 良 氏(発行:ミデアム出版社)

本作品は、数々の名馬を生産し、日本の競馬界をリードしてきた社台ファームの揺るぎなき基盤を築いた吉田善哉の伝記である。副題の「馬・吉田善哉・社台ファーム」が示すように、名馬の「血統」の重み、吉田善哉という人物の競馬への情熱と牧場経営者としての「知」、名馬を育成する条件が整った場としての社台ファームという「地」の3つの観点から、日本の競馬文化形成の一断面を描き出しつつ、吉田善哉の人的魅力をあますところなく伝えている。著者は、善哉との間に10年にわたる交友があり、ともに過ごした折の善哉の言葉と行動を愛情を込めて再現している。また、著者自身、善哉との間に信頼関係を結ぶために配慮していることが叙述から伝わってくるが、善哉の本音を引きだそうとするやりとりのなかで、著者自身の人生に照らし合わせ、一人の人間として率直に感じたこともさしはさむなど語り口には味わいがある。吉田善哉の豪放かつ繊細な性格、相手への気遣いや照れ隠しからのユーモアに垣間見える不器用なやさしさなど、肉声の響きと息遣いを伴って伝わってくる。善哉の生い立ちを伝える部分で、善哉の兄たちと父善助との関係について読者に誤解を与えないよう著者が配慮している点(「こう書くと、善一さんと善二郎さんは父親と気が合わなかったのかと読まれてしまうかもしれない。それでは、私の書き方が人を傷つけ、失礼をすることになる。よそさまの家族関係について簡単に口をはさんではならないのを、私は知っているつもりだ。」本文60ページ)にもみられるように、いたずらに想像をめぐらせて書くのではなく、書く対象にあくまで誠実であろうとする姿勢も一貫している。「吉田善哉」と書いたり、「善哉さん」と書いたり、書き手の視点のぶれもみられるが、「いい馬に出会いたい」という夢を常に見続けた吉田善哉という男のロマンを語るのにそれほど差し障るものとは感じられない。ただ、競馬のことをよく知らない読者には、流れがわかりにくい部分や解説がほしい用語などもみられる。この点に広い読者層を考慮した工夫が欲しかった。全体を通じた印象としては、本作品は、客観的な立場から書かれた伝記というよりも、むしろ著者の故人へのオマージュといえるであろう。

『カープ球団創設50年史』企画連載報道 中国新聞社 カープ50年取材班

広島東洋カープが創設されて50年目にあたる99年、中国新聞は年頭からカープをめぐる多角的な企画を進めた。まずは、朝刊スポーツ面で1月から9月まで続いた「よみがえる熱球」と題した選手列伝である。赤ヘル軍団を象徴する山本浩二、外木場義郎、衣笠祥雄に始まり、後は時代を追ってチームを支えた100人の選手・外国選手、そして12人の歴代監督が紹介される。続いて4月からは週1回、1ページの「われらカープ人」というタイトルの特集ページが生まれ、カープを支えたファンや市民の活動をメインに球団事情や時代背景を織り込んだ読み物が掲載された。

カープは、他の球団とはひと味違って、市民とファンがつくり育ててきた伝統がある。市民がカープに愛情を注ぎ、そこにプロスポーツと地元との幸福な結びつきを土台にしたスポーツ文化が形成されていく道筋が、この企画を通して熱く語られている。無論、50年のお祭りの球団賛歌ではあるのだが、通り一遍の記念企画を越えた読ませる記念誌になっている。中でも球団を支えた市民たちの「ちょっといい話」を集めた「われらカープ人」は出色で、カープ存亡の危機の折に市民が寄付集めをして球団を支えた話や、カープの躍進と念願の優勝がどれほど市民の喜びと励みになったかということなどを通じて、カープが市民生活に不可欠の要素であったことが伝わってくる。

新聞社と記者たちが「鯉心」いっばいに、ここまで徹底してカープ賛歌を奏でたことが微笑ましくもあり、うらやましくもある。地方紙の特権をいい意味で活用した好感の持てる作品と言えよう。